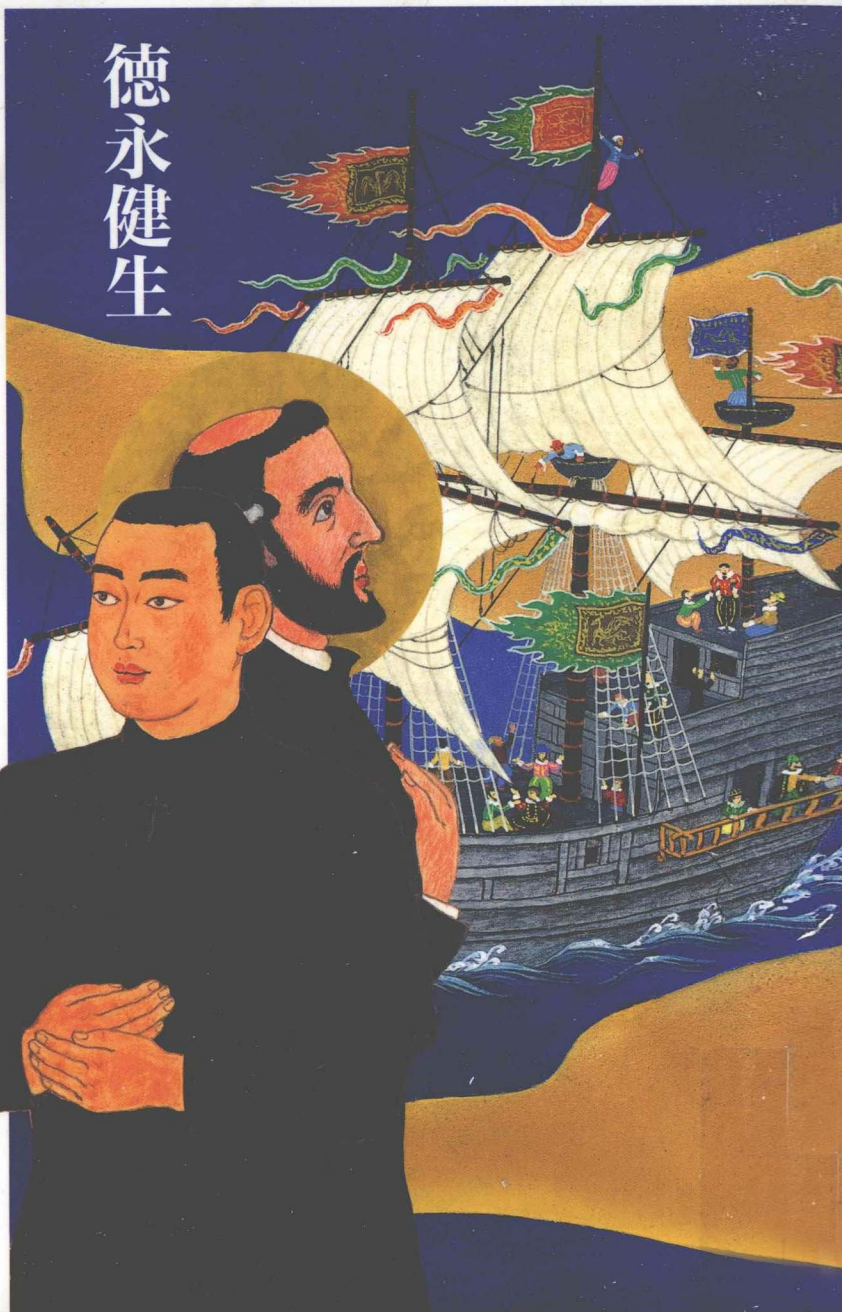
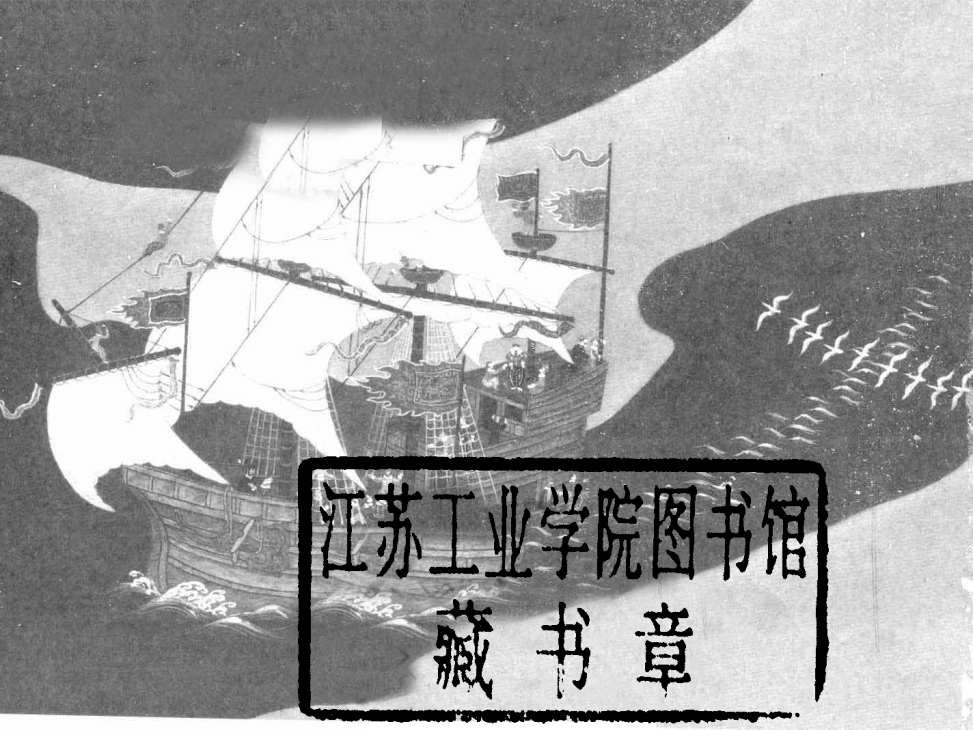


ロザリオの海

徳永健生





江苏工业学院图书馆
藏书章

ロザ

徳永健

の
海

リオ出版

徳永健生(とくなが・けんせい)

昭和16年鹿児島県生まれ。早稲田大卒。
鹿児島県高等学校文化連盟会長。鹿児島
県NIE推進協議会長。前鹿児島県立図書
館長。著作に「たまゆらの海」(丸山学芸
図書)など。

- 装丁 舟橋菊男
- 装画 宮下勝行

ロザリオの海

1999年9月20日 第1刷発行

著 者 徳 永 健 生

発行者 石 井 昭

編 集 リベロ社・戸谷龍明

発行所 株式会社 リブリオ出版

東京都文京区大塚3-5-11

住友成泉小石川ビル別館3階(〒112-0012)

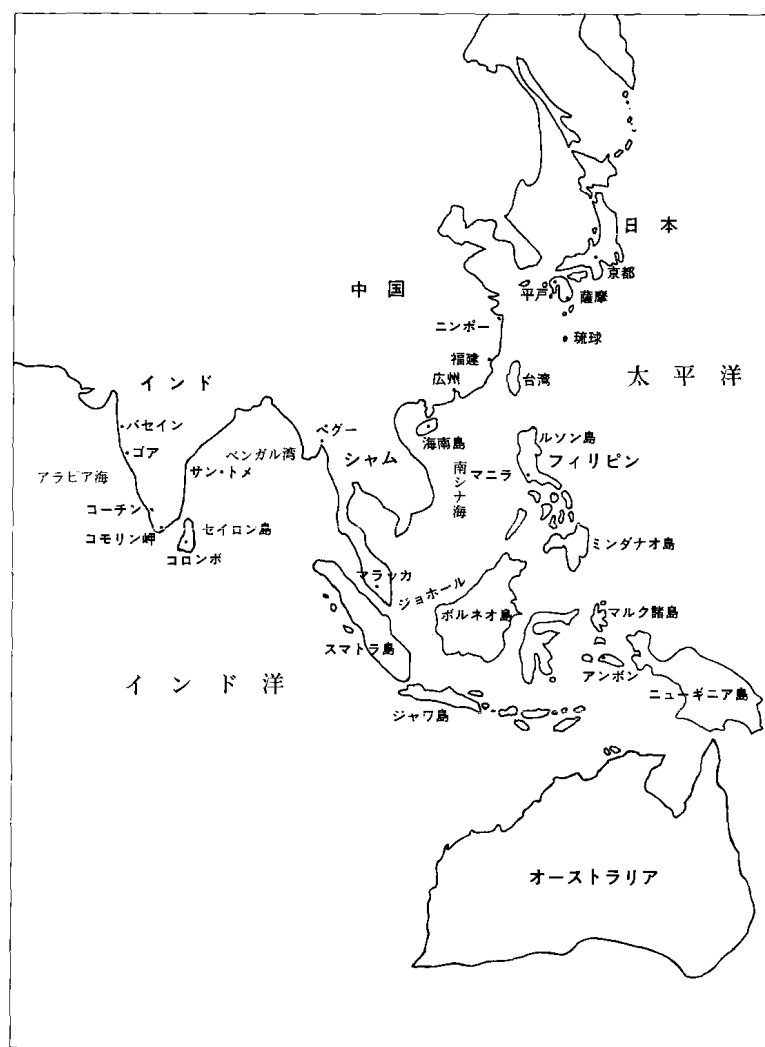
電 話 東京(03)3943-8885 F A X (03)3943-3540

印刷・製本 大日本印刷株式会社

©徳永健生 1999

ISBN4-89784-746-X C0093

ロザリオの海



「何も、そこまで自分を追いつめることはあるまいがよ……。弥次郎さまが獄門になるんじゃないと、誰が決めました？」

「いや、ちよつと涙橋の様子を見てくるだけじゃ」

マラツカからの復路の船中でも再三わたしを引きとめた茂助の制止を振りきり、昨夜のうちにしたためておいた別れの手紙をそつとザビエル神父の足もとに置くと、わたしは夜が明けるのを待つて船津町の旅籠はたごを出たのです。それから三里ばかりの道のりを小走りに歩きとおして、つい先刻、新川の涙橋のたもとに着いたところでした。涙橋はその名とおり哀かなしい橋で、親戚縁者らが右岸の丘の中腹の刑場へ曳ひかれていく囚人しゅうじんと最後の別れを惜しむ小さな木橋でした。

それにしてもその朝、涙橋の周辺は大変な騒ぎでした。何でも、今日の処刑はポルトガ

ル銃の試し撃ちだという噂が市中を駆けめぐっていて、処刑の現場には立入りできぬというのに、物見高いよそ者までが橋のまわりを遠巻きにして、囚人籠の到着を今か今かと待っていたのです。

橋の右手のいかめしい高札は、三人の処刑を告示しておりました。市中引き回しのあと馬から引きずりおろされた最初の男は、見るからに渡世人ふうのいかつい面相をした大柄の男でした。橋のうえで何か大声でわめきながら唾を吐いたり、守衛の腹を蹴ったりしてしたたかに抵抗しておりました。とうとう下役人を怒らせて、櫓の警棒で一撃をくらったのも無理はありません。一部始終を見つめながらさめざめと泣いている老婆は、男の母親のようでしたが、ついぞ男は、老婆の姿を眼にとめたふうではありませんでした。

二十歳前後の年恰好のふたりめの男は、半狂乱の様子でした。ひび割れた欄干に軀をすりつけ、両足をつっぱって、助けてくれ、助けてくれと、まるで駄々をこねる子どものように脅えておりました。そんなに意気地がないのなら初めから悪事を働かなければいいのだと思った瞬間、わたしはわが身を顧みて他人ごとではないことに気づき、身の縮む思いがいたしました。細面の華奢な顔立ち、処世の苦労などしたことのない、どこか商家の息子のようにでした。

もうひとり透かしの囚人籠を出た初老の武士で、みずから望んで死地に就こうとする

かのように胆きものすわった歩き方で一步一步踏みしめ、静かに橋を渡っていきました。ちょうどいま薩摩さつまでは、守護職しゆごしょくの島津宗家しまづそうけが実権を失い、島津分家の忠良・貴久父子たかよし たかひさが台頭たいとうしてきてはいたものの、ひとたび府外へ出ると本田、北郷ほんこう、祁答院けどういん、肝付氏きもつきらの国衆くにしゆうとの抗争が絶え間なくつづいておりましたから、もしかするといずれかの家中を見せしめのために連行したのかもしれない。橋のうえでも、刑場の役人のひとりが頭をたれて見送ったところを見ると、粗略そりやくには扱えぬ名のある武将のような気がいたします。

そんな喧騒けんそうも、涙橋の向こうの丘の中腹で大音響が飮くだましたあと、小半時（三十分）もするとおさまりました。楠くすの森をゆるがしたその大音響が何ものであるのか、わたしには容易に理解できませんでした。申すまでもなくそれは、ゴアでもマラッカでも、兵士といわず商人といわずポルトガルの人々がつねに携行していたあの恐ろしい武器、ムスケット銃きくわつの炸裂さくれつした音響に違いありません。

橋のたもとの人々の群れは、いつの間に四散したのか、あとは虚むなしげに夏蟬なつげみの声が響いていただけでした。人の世は露のごときものとはよく言ったもので、ほんとうにはかなく浅ましいものでした。

「さあ、俺おいどもも引きあげなければ……」

わたしが重い腰をあげたときでした。橋のすこし下流の楠の木の下に、中年の女と若い

娘がうずくまっているのが目の縁にとまりました。

「もっと、きびしう育てておけばよかったものを……」

とぎれとぎれに聞こえてくる自責のことばには、何とも例えようのない悔恨と切なさが込められており、女の肩を抱きあげようとする若い娘の嗚咽にも、言いようのない悲しみがあふれておりました。遊興費ほしさに、とある武家の屋敷に忍び入ったのだと、ひそひそ薄笑いを浮かべて通りすぎていったのは、同業者らしいふたりづれの男でした。わたしは思わず、両手をあわせて祈りました。

「主イエズスよ。汝の寛いところをもつて、罪びとたちを恕したまえ。主イエズスよ、汝の慈しきをもつて、残されし者たちの悲しみを慰めたまえ！」

その祈りは、でもほんとうのところ、人さまのためだけではありません。むしろそれはわたし自身のためのもの、と言ったほうが適当なのかもしれません。

ところで、わたしはまだ自分の名前も素性も名乗っておりません。わたしはポーロ・ヤジローと呼ばれて、今はデウスの神に仕える下僕のひとりなのです。とはいってもどこかの神学校か修道院できちんと修学したわけではなく、あるいは敬虔な信徒として何十年も神のことを祈りつづけてきた者でもありません。ただただ忌まわしい自分の過去を清算したいというそれだけの願いから、ザビエル神父という尊いお方のもとで神の御名を讃える

ようになった、いわば通りすがりのケチな男にすぎないのです。

わたしはこの三年の間、イエズス会に所属しているフランシスコ・ザビエルという希有の神父、神父というのは日本の神社という僧侶や神官のようなものですが、そのザビエル神父のもとで小間使いをしておりました。それはルソンという島からさらに西の、インドという途方もなく広大な国の、西側にあるゴアという街まちのことで、そこには聖パウロ学院という学問所があり、そこでわたしはもったいなくも、ポーロという尊い聖なる名をいただいたのです。その名をくれたザビエル神父のお供をして、つい先月の下旬、ふるさとの薩摩へ舞い戻ってきたのでした。トルレス神父やフェルナデス修道士といった方々もいっしょでした。

ゴアという街は四季のない、それはもう暑い暑いところでした。灼熱しゃくねつの太陽がいらだたく大地を焦こがし、たとえば真昼の陽射しはたちまち桶おけの水を煮え立たせ、砂のうえを這はいまわる蛇の胴体を乾いた縄にしてしまうほどのすさまじさでした。わたしがこの薩摩へ帰ってくる気になったのも、ザビエル神父との運命的な出会いがあったことのほかに、たびたびはげしい眩暈めまいを引き起こさせたあの厳格な風土、ただでは人間の生存ゆゑさえそうとしない激越げきえつな直射日光、そしてあのマラッカに居残って自分を貫きとおした三郎助の存在がそうさせたのかもしれない。

わたしがこの涙橋にやってきたのは、今日が二度めなのでした。わたしの決心が、ほんとうに確かなものかどうかを見極めるためでした。昨年の暮れ、ゴアの聖パウロ学院でいよいよ日本へ行こうと決断したザビエル神父が、ひとりでも赴くのだと宣告したときから、引導するの自分をおいて余人はないと覚悟しつつも、過去の過ちは過ちとしてその責めを負わねばならない。いかにデウスの神に宥しを乞うたとはいえ、いやしくもこの世にある者ならば、たとえ偽善だの欺瞞だのと蔑まれたとしても、やはりこの世の法の裁きを受けねばならぬ、そんなふうに関心を決めて故郷の薩摩へ帰ってきたのでした。

そうなのです。わたしは三年まえ、人殺しをしてしまったのです。今でこそこんな異形の身なりをしておりますが、人をあやめて逃亡を企て、首尾よく山川に寄港してきたポルトガル船にもぐり込み、この世の果てかと思われるあの僻遠の地、インドのゴアという大きな街へ逃れていたのです。

「さあ、ほんとうに覚悟はできたのじゃな」

鬱蒼と盛りあがった楠の丘をもう一度見あげると、わたしはそうつぶやき、意外と冷静な気持ちでゆつくりと歩き出しました。これから新川の土手に沿って河口にくだり、それから潮の干いた砂浜を踏みしめながら、この世の見納めになるかもしれない桜島の姿を心ゆくまで見ておこうと思うのです。そこいらはかつてわたしが無我夢中で逃げまわったと

ころですが、今は兵馬の脅威も国境の北へ移っておりましたから、安心して歩いていけると思うのです。気が向いたら、松風の音を聞きながら天保山の松林のなかで午睡をし、うまくいけば誰かの小舟に便乗させてもらつて釣糸を垂れ、そして夕方になつたら甲突川をさかのぼつて西田村の近くまで行つてみようと思うのです。そのあたりからは、子どものころ遊んだ西田村の田んぼや原っぱがよく見渡せました。それが済んだら船津町へ戻り、実家の店跡をもう一度この眼に刻んでおかなければなりません。

このまえ、われわれの乗つたアバン号が祇園之洲に錨を投じたあと、ザビエル神父は早々に薩摩きつての学識、福昌寺の忍室和尚との面談を果たし、またいち早く主イエズスの教えに心を動かした市来城主新納伊勢守の斡旋によつて、太守の島津貴久公とも日置の一字治城で謁見する段どりを取りつけたのですから、曲がりなりにも、神父引導のわたしの役目は終わったような気がするのです。

あとはただ、ザビエル神父みずからの力に期待するしかありません。さいわいわたし自身は、わたしが殺した義助の墓にもう三度も詣でましたし、また親不孝をしてしまったわたしの両親、弥平とヤエの墓標にも花を供え、妻のサヨや妹のサトはもちろん山川の六平衛とも夜を徹して語り明かしましたから、もういつまでも逃亡への執着や神父への未練にしがみついてはならないのです。すべては大事のまえの小事。いくら遅くなつてもわ

たしは今日のうちに、御春屋おつぎやの番所へ出頭しようと考えているのです。でなければあの日、福昌寺の本堂で、素性を明かさぬまま通辞つうじ（通訳）をしていたわたしへ優しいねぎらいのこ
とばをくれながら、しかし一方で、化けばそこなった古狐の尻尾でも探すような眼をした忍
室和尚のあの冷たい視線から、そうやすやすと逃れおおせるはずもないのですから。

Ⅱ

三年まえの秋の終わりのことでした。西暦なら一五四六年、わが国の年号だと天文十五年、ちょうどわたしが三十になった十一月、その日はなぜか夏に戻ったような暑さでしたが、清水城から南へ延びる谷山街道はひどく緊迫し、街道筋の至るところで兵馬の疾駆しつくする姿が見られました。じつは魘府げいふの北、加治木城かじきの肝付兼演かねひろ、国分姫木城こくぶひめぎの本田董親たんだうからを制圧しようとする島津忠良の援軍がつぎつぎに繰り出していたのです。

そのころ、島津氏は薩摩、大隅おおすみ、日向ひゅうがの三州を掌握してはおらず、ようやく島津分家の

伊作城主島津忠良が宗家の島津実久を出水に逼塞させただけで、薩摩一国さえ内紛の有様でした。加治木の肝付兼演、国分の本田董親らをはじめ、帖佐の祁答院良重、蒲生の蒲生範朝などが割拠し、まして北薩摩の渋谷重嗣や佐土原の伊東義祐らに對してはまったく手の及ばぬ状況にあつたのです。

もつとも、こんな状況をわたし自身が熟知していたわけはありません。これは後日、わたしがアルヴァレス号のなかで豊後の竹元朝兵衛という侍に聞いた話で、わたしが知っているのはせいぜい清水城下のわずかな動静に過ぎませんでした。

その島津忠良の援軍が覺府南郊の谷山に兵を進めて今日にも紫原を越え、市中を通り抜けて吉野、白銀坂を越えて加治木方面へ進攻するだろうという噂は、町人たちが巻きぞえにあわぬよう流した先駆けの軍勢の警告だったので、果たして兵馬は払暁から動き出し、その日、町中の商家は戸を締めまわし、息をひそめて戦禍を避けておりました。滑川の朝市もはやばやと露天の小店をたたんで、閑散とした空き地には餌をあさる野良猫が跳ねておりました。

もちろん、わたしなどは武家の争いにまったく無関心でしたから、律儀で質実な親父の心配をよそに、わたしはいつものように甲突川の河口へ夜釣り用の餌をとりに出かけたのです。わたしは何よりも海が好きで、道楽といえば唯一、小舟を浮かべて釣りをする

ことでした。夏は素もぐりをして銚を突き、冬は雪の日でも凍える手で寒鯛の糸をたぐるのが無上の楽しみでしたから、その朝も、父の愚痴に耳を傾ける気持ちなどこれっぽちもありませんでした。

「釣りをやめろとは言わん。花街の女にうつつを抜かすことに比べたら、他愛のなかことじゃ。じゃつどん（だが）、今日は危なか。谷山には伊作の軍勢が集結しておるちゅうではないか。こげな日に、釣りでもなからうがよ」

物置のそばから親父の小言が聞こえてきたのは初めの部分だけで、わたしの軀はもう勝手口から飄然と表のほうへひるがえっておりました。

わたしの実家は、さつきも申したとおり、港近くの船津町にある西田屋という油屋でした。先祖の素性については何も知りません。さかのほれば禰寝氏の家臣だったとか、あるいは山川の漁師だったとか、いつか遠縁の者がそう言った記憶がありますが、そんなことはどうでもいいことでした。ただ、こうも海が好きなどころをみると、どうやらどこかの船子か漁師の血が流れているのかもしれない。でも親父の弥平は、一網いくらの一攫千金を狙う漁師の性格ではありません。いくらかの身代を興してきたのも、爪に火を燈すような儉約と勤勉の結果でした。夢のなかでも算盤を離さぬ暮らしがすっかり身について、わたしが家業を顧みないのも、そんな父の姿を心のどこかで軽んじていたせいなのか

もしれません。むろん親父はわたしが家業をないがしろにしていることを叱りました。でも母のヤエが、商家の倅せがれながら読み書きに長じていた子どもころそのままのかわいがりようで、それくらいは大目に見てやってほしいと取りなしてくれたことや妻のサヨが働き者だったこともあって、このごろではとげとげしく目尻をあげなくなっていたのです。

「さあ、今夜は間違いなしじゃ！」

わたしは甲突川の下流付近で盥たらひのような小舟を流し、湧き出してくる生き餌ぎこの雑魚ざこをニンマリ笑いながらすくっておりました。

すっかり夜は明けて、桜島の両翼の稜線から朝の光が薩摩さつま潟がたの水面にギラギラと差しわたってきたとき、ふと振り返ると川の上流の天保山橋を、数十の騎馬と前後しておおぜいの侍たちがあわただしく渡っていくのが見えました。

「いつまで戦さをする気かよ。早う鎮しずまってくれんかの」

しばらくわたしは、河岸かがんの松林の向こうの光景を冷やかに眺めておりました。じきにまた後続の軍勢が橋を渡っていき、この戦さもいつ果てるもしれぬ有様で、そのせいかいともなら姿を見せる釣り仲間の久作きゆうさくや朝吉あさきちもやってきませんでした。巻きぞえを食つては元も子ありません。番頭の吉蔵きちぞうが迎えにきたのもそのときでした。

どうやら忠良軍の軍勢はことなく市中を駆け抜けて帖佐方面へ進攻したようで、名山堀めいざんぼり

のあたりも夕刻まえには平穩になり、朝がたの商いを取り戻そうと、路地を売り歩く小間物や草履売りのかけ声があちこちから聞こえてきました。その晩、夜釣りを諦めなかったのは言うまでもありません。台所の隅で急いで蕎麦をすすると、気持ちはもう名山堀の舟泊まりのほうへ一足先にすつ飛んでいったような感じでした。

「やあ、今日もかい。好きじゃのう」

「お前さあこそ！」

舟のほうから声をかけた朝吉を見送ったあと、鱸綱を引っ張ろうとして、ふつとわたしの手は止まりました。銀丸の隣に繋いでおいた弥次郎丸の姿が見当たらないのです。わたしは一瞬勘違いでもしたのかと訝しがりながら、舟泊まりのなかを見てまわりました。

「どげんしたというのじゃろう？」

わたしははやる気持ちを抑え、舟泊まりの石畳に腰をおろして記憶をたどり直しました。しかし、銀丸の隣に繋いだ記憶は鮮明でした。その弥次郎丸は、この夏進水させたばかりの、吃水が深く水切れのよい優れものでした。本業の漁師でさえうらやむほどの型のよさは、わたしのうぬぼれを増長させるのに充分な代物なのでした。

すこし沖あいの舟の出入りを窺っているうちに日はトッブリと暮れ、わたしの狼狽はいつかジリジリと苛立ちに変わり、はげしい腹立たしさに変わっていききました。そのときと